

公衆を対象とした放射線のリスクコミュニケーション

木下富雄

公衆が持つ放射線の知識は限られている。実生活においてもその必要性は低い。F1 事故後のニーズの高まりはむしろ例外と言えよう。このような公衆に放射線の知識を伝達するのは難しく、ましてや正しく理解して貰うためにはそれなりの技術を必要とする。

- (1) まず出会い時における関係作りが大切で、コミュニケーターは公衆の無知や過度の不安を非難することなく、ありのまま受け止めてやる必要がある。
- (2) 参会した公衆の持つ興味の方向や考え方のロジックを見極めて、それに沿った論理展開を行うこと。公衆は一律ではなく、性別、年齢、職業、地域などによって興味が大きく異なるからである。
- (3) 専門家が必要と思う知識は必ずしも公衆の望む知識ではない。(例えば放射線と放射能の違いなど) 専門家の独善を避けること。
- (4) 公衆が特に理解しにくいのは、大数法則に則った説明や確率的な表現。欲しがるのはむしろ個人レベルの影響である。リスコミの場合は学校教育や学会発表と異なる。
- (5) 説明内容や回答内容は絞り込むこと。盛り沢山で詳しい説明や回答は、認知的オーバーフローを起こしたり意図を勘ぐられたりして逆効果。
- (6) 平易な表現を心がける。専門用語や外来語は原則として用いない。(例えば線量率効果は重要な概念であるが、砕いた形で表現しないとわからない)
- (7) 理解を進めるために他の身近なリスクを引き合いに出すのは良いが、比較の対象を誤るとこれも逆効果。よく見られるミスは喫煙や自動車事故(voluntary risk)との比較。
- (8) 放射線の影響という受け身の問題だけではなく、自分にもできる能動的な対応法(ミニ除染など)を教えると喜ばれることが多い。
- (9) リスコミは双方向性のコミュニケーションである。公衆との対話を確保する姿勢を忘れずに。
- (10) 今後問題が発生したとき、どこを訪ねると正しい情報が得られるかを教えておく必要。公衆の多くは医師なら誰でも放射線の知識を持つと誤解している。
- (11) これら全ての背後にあるのは「信頼」。それさえあれば口べたな説明でも OK。